

『子供』に『ルール』はないのです

坂田三允（長野県看護大学）

久しぶりに本屋に寄ったとき、平積みされ「買ってくれ」と強く自己主張していたのが本書である。帯封には「『家族』に『ルール』はありません。『子供』に『ルール』はないのです」とある。無境界家族？ 新しい家族論なのだろうか。もう少し丁寧に帯封を見ればそんな勘違いはしなかったのだろうが、真っ赤な表紙に白抜きされた無境界家族という文字が私を捉えて放さなかった。

読了して、勘違いさせてくれた表題に感謝した。これはあちこちで生じている出来事をつなぎ合わせて打ち立てた怪しい「論」などではなく、一人の男すなわち著者のルールもルールも無視した、それでいて決して他者に迷惑をかけず、不快にさせない「大人」の生き方の、そして子育ての記録である。

著者は、帯封によれば、「妻は碩学、息子は天才、あたしゃシドニー博奕打ち」なのだそうである。博奕打ちというのが職業(?)として成り立っている、つまり生活するに困らない程度には博奕で稼げるという人が存在すること自体私には驚異である。自分を律することができて、冷静にその場をみることができなければ賭け事というのは勝ちつづけることなどできないに違いない。実際著者は「欲求・欲望とは、その性格上の属性として限界を知らない。(中略)肥大し拡張した欲求・欲望は、確実にその持ち主を殺す」といい、「そこでわたしは自らの欲求・欲望に、なんらかの制限を設けるのである」。それができなくて、妻子を路頭に迷わせたり、身を持ち崩していく人の何と多いことだ

ろう。私には到底真似のできない生活で、そのことだけでも、私は著者を尊敬するのだが、この著者の子育てがまた素晴らしいのである。

妻が多忙を極める大学教授であるがゆえに、博奕で家を空けるとき以外は、家事・育児をすべて担当した著者の育児または教育の基本方針は「好きなことだけをおやんなさい」であった。その代わり、息子がやりたいことには協力を惜しまない。8歳の「息子にコンピューターを買い与えた。子供向きのものではなくて、当時の金額で1万8千豪州ドルしたIBMのパソコンである」。息子は好きなことだけをやった結果、13歳で大学の講義を聴講することを許され、20歳にしてカリフォルニア大学で純粋数学の教職につく。息子のもって生まれた才能という問題とも関係することではあろうが、何より息子にルールを敷かなかった著者は才能をつぶさないですんだのだと思う。

ケンブリッジ大学を主席で卒業した息子は、謝恩のパーティで指導教官を初めとした何人かの人々に謝意を表した後、「最後になるが、けっして些細ではない、わたしの父ヒロシが、ただそこに居てくれたことに感謝する」と淡々と述べるのである。そしてその時、自由にならなかったから、可能な限り「境界」を解体し、伝統や習慣をけちらして「日本」あるいは「日本人」という境界をも否定する著者は、「だらしくも熱い熱い涙を頬から顎にかけて、大量に滴らせていたのです」という、私が思うにあまりにも日本人的な反応をみせてくれるのであった。



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

●長野県看護大学：〒339-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1694